



Interview part 3 インタビュー

佐野 壮さん (ヌイカンパニー 代表理事)

たくさんの人に愛され、世界で認められる洋画家
となった佐野さん。これまで一番近くで見続けてきた
次男の佐野壮さんにお話を伺いました。

▲【1996年】パリ個展取材同行で休憩中（佐野ぬいさん…写真右／佐野壮さん…写真左）

ぬいさんの創作の思い出

面と向かって芸術や絵画の話はほとんどしませんでした。小学生の頃から絵を運んだり、木枠にキャンバスを張ったり、筆を洗ったり、下地を塗ったりなど制作の手伝いをしていました。

私が社会人になると、専属のアシスタントが代わりに母のサポートをするようになりましたが、ニューヨークの取材旅行やパリの個展などには私も随行し、道案内や写真撮影などのアシスタントをしました。それなりに役に立っていたと思います。

制作は体を使う大仕事

母は身長を超える大きな作品も手がけていましたが、手の届かない部分は、踏み台に上がって描いていました。130号サイズ（162.0cm × 194.0cm）以上になると、絵画全体の構図を確認するために数メートル後ろに下がったり、踏み台に上がった...それを何度も繰り返していたので、母にとって良い運動だったと思います。



▲【2015年】アトリエで

弘前が母を支えてくれた

津軽弁が大好きで、家族や弘前の友人たちと電話で話すと、津軽弁がしばらく抜けませんでした。晩年は、弘前市出身の訪問看護のスタッフさんと津軽弁で会話をしたり、伊奈かっぺいさんのトークCDを聞いたりして楽しんでいました。

アトリエには、「故郷忘（ぼう）じ難し」と書き添えた岩木山の絵をずっと掛けていました。祖父（ぬいさんの父親）が亡くなったときは、「父逝きてモノクロームの岩木山」の句を書き添えた岩木山の絵を描いてしのぶほど、岩木山にも愛着がありました。

思い出す母の笑顔

2、3年に一度は帰省するほど弘前が大好きで、弘前市名誉市民の荣誉にあずかったときは、とてもうれしそうでした。

インタビューで「弘前が大好き」と答えていた爽やかな笑顔、大好物のうなぎを食べたときのいたずらな笑顔、スタンドグラスを背景に写真を撮ったときの満足な笑顔...、弘前にいると笑顔を絶やさない佐野ぬいでした。



▲【2015年】名誉市民顕彰で帰郷の際、弘前城で（佐野さん…左から2番目）

明日のテーマ

2021年、弘前れんが倉庫美術館「りんご前線—Hirosaki Encounters」では、「明日のテーマ」を展示タイトルに作品を出品した佐野さん。作家としての原点に関係する作品のほか、日記代わりに描き続けたO号サイズ（14.0cm × 18.0cm）の新作を用意し、作品を通して画業を紹介しました。

弘前れんが倉庫美術館の公式YouTubeチャンネル（QRコード）では、佐野さんのインタビュー動画を配信しています。



今号の表紙



今号は、佐野ぬい作『セルリアンブルーの街』（2022年／181.8cm × 227.3cm）を表紙に選びました。

大病からの復帰をかけ、車いす生活の中、絵筆を長い棒の先にくくり付けて描き上げた最後の大作です。

この作品は、学長を務めた女子美術大学（東京都杉並区）で行われたお別れの会で披露されました。

ニューブルー、永遠に

これまで振り返ってきたように、家族や友人、生徒を大切に、画家として創作に励んでいた佐野さん。弘前を愛し続け、弘前市内で展示会の開催や、スタンドグラス『青の時間』の制作など、市民が芸術に親しむ機会を与えてくれました。

これからも、皆さんに佐野さんの作品に触れてもらえるよう、佐野ぬいさんの企画展や『青の時間』オリジナルラベルの津軽ワイン（津軽ワインの詳細は本誌22ページに掲載）の展開を予定しています。楽しみにお待ちください。



▲弘前れんが倉庫美術館での会場風景（撮影：柴田祥）
左から：ブルーノートの構図（1994年）、余白のテーマ（2006年）、日記のテーマ（2013年）、青の様式（2019年）、左手のための序曲（2009年）

『セルリアンブルーの街』ができるまで

- 佐野壮さん -

完成後に題名を付ける作品が多い中、本作は珍しく先に題名が決まっていた作品です。

広い面積の青を中心に、多色で複雑にしない構図で計画をたて、キャンバス全体に薄い青の下塗りをしました。病気で制作が一時中断しましたが、2022年に制作を再開します。意外にも、車椅子での制作や体力の衰えは、青をメインにしたシンプルで潔い構図を生み、当初の計画が見事に実現したのです。

透明感のある街並みがセルリアンブルーに染まり、すがすがしい表情で「これでいい」と言って筆を置きました。



▲【1980年代】アトリエで